

石井筆子の幼少期に関する研究ノート

津曲 裕次¹

(1998年11月13日受付, 1998年11月30日受理)

A Study Note on the Early Life of Fudeko Ishii

Yuji TUMAGARI¹

(Received : November 13, 1998. Accepted : November 30, 1998)

はじめに

石井筆子とは、1891（明治24）年、東京に日本で最初に民間知的障害児学校「滝乃川学園」を設立した石井亮一夫人である。従来の研究では、筆子研究は、石井亮一研究の一部として位置づけられ、夫の事業を財政面で支える「内助」の人物の研究として位置づけられてきた。こうした視点の元に、1970年代に始まった石井筆子研究は、結婚前の筆子が、日本を代表する婦人教育者であり、また、その先夫との間に「障害」児をもうけた「母」であることを明らかにしてきた。筆子は、亮一の事業の援助者であると同時に、婦人教育者及び障害児の親としての共同事業者としての視点からの研究が必要となった。

こうして、1980年代以降、独立の研究課題としての石井筆子研究が始まった。多くの人々の示唆によって、その生涯を明らかにするところまで来たが、まだまだ、未知の部分も多い。その一つが、筆子の幼少期である。これまでの研究によって、筆子は、少女期から青年期にかけて、既に、英語、仏、蘭語等を理解し、更に、キリスト教に関心を寄せていたことが明らかにされている。しかし、その幼少期については、不明である。本稿は筆子の父渡辺清と叔父渡辺昇の経歴を手がかりに、筆子の幼少期の生活の解明を目的とする。

因みに、渡辺清、昇の兄弟は、幕末維新史において、薩長土の志士たちと共に活躍した人物として、多くの史書に取り上げられる人物である。し

かし、その人物についての研究は外山幹夫氏の大村藩の「丁卯の内訌」を中心とした研究¹⁾があるだけである。本稿では筆子の上京前の生活の一部を、渡辺清、昇の生涯を通して明らかにする。

本論 石井筆子の幼少期の研究ノート

1. 西欧志向の父、渡辺清

渡辺清は、1835（天保6）年、昇は1838（天保9）年、肥前の大村藩で生まれた。清と同年、坂本龍馬が生まれている。江戸時代の大村藩は、肥前大村湾一円を本拠とする2万7,973石の小藩であった。江戸時代には、幕府の軍役負担などで、財政難に陥ったが、1836（天保7）年の藩政改革を経て立ち直り、1847（弘化4）年には、第12代藩主大村純熙が藩政の改革に乗り出した。特に、長崎警護の特役を持つ大村藩にとって、迫りくる外圧にいかに対処するために、藩財政の確立、洋式兵制の導入による軍制の改革、大砲、軍艦などの軍事力の増強政策が実施された。藩主自ら洋学に興味を示すと共に、文武の振興の政策を進めた。清と昇は、こうした騒然たる時勢に生まれ、その少年時代を送った。

清は、早くから洋学に関心をもち、藩公大村純熙の蘭学の師尾本公同に蘭学を学んだ²⁾。叔父昇は、藩校「日新館」で漢学、北辰一刀流、水戸学を学び、国事に目覚めた。

藩では、1854（嘉永7）年6月には、五カ年の「質素儉約令」を出し、6月から7月の境の頃、

1 高知女子大学社会福祉学部社会福祉学科 Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, Kochi Women's University

尾本公司に、清ら大村藩の諸生を率いて長崎に出て蘭学塾を開設させた。同時に、大村藩においては、同じく1855（安政2）年6月、軍制の改革に着手し、同19日従来の弓組を廃止して、西洋式の銃隊を編成した。また、7月17日には、それまでの一刀流、新陰流をやめて新たに神道無念流を採用した³⁾。当初、北辰一刀流を学んでいた昇も、神道無念流に流派を替わっている。坂本龍馬は北辰一刀流であった⁴⁾。加えて、軍制の改革として高島秋帆の西洋式練兵方式を採用した⁵⁾。この経過について、晩年、清は、藩主の諮問に答えて、西洋式の銃隊編成を進言したとしている⁶⁾。

清は、この間、長崎と大村を往復していた。この進言が行われた年を推定すれば、1857（安政4）年から1858（安政5）年頃となる。時あたかも、幕府においても、1855（安政2）年の末、長崎に海軍伝習所を開設し、オランダから贈与された汽船の運用の研究を名目として、オランダからペルスレイケンを招いて、航海術、機関術等を教授させた。伝習所には、幕臣、佐賀藩、福岡藩、鹿児島藩など、総勢250名近い人数が学んでいた⁶⁾。

その理由は、明らかではないが、ここには大村藩の名前が見あたらない。そうしたこともあったのか、清らは、長崎の五島町町家を借りて、オランダ語を学び、医学研究を名目に、出島に出入りして蘭医について、医学、製鉄、機械の事などを学びながら、ペルスレイケンらへの接近を図った。しかし、規制が厳しく、目的を達することは困難であった。そこで、尾本公司は、諸生一行を、1856（安政3年）5月、大村に戻すことにした⁷⁾。

この長崎時代、清は、出来れば洋行したいと考えていた。また、長州出身の松島随益の砲術研究に学び、兵学研究に力を入れていた⁸⁾。しかし、大村に戻されると知って、清は、脱藩して長崎から江戸に向かった。この時、藩は、その意図を壮として、清を、脱藩者としてではなく、藩の許可を得た江戸遊学として認めている。清の江戸出府の時期については諸説があるが、『台山公事蹟』は1857（安政4）年4～5月の間としている⁹⁾。

この間、時期は明らかでないが、清は、勝海舟に蘭学を学んでいる。勝海舟が海軍伝習所の頭取として長崎に滞在したのは、1855（安政2）年10月末から1859（安政6）年1月5日、朝陽丸で江戸に出発するまでの約三年間である。清は、1856（安政3）年5月に帰藩している。長崎で、勝の門を叩くのは、勝が長崎に来て半年の間である。少し、無理ではなかっただろうか。可能性として、清は、一時大村に帰り、改めて長崎に出て、勝の門下となり、そこで、刺激を受けて、江戸出奔と考えたい。時は、『台山公事蹟』の云う1857（安政4）年4～5月頃であった。勝海舟は後に筆子の後援者となる素地はここにあった。なお、1856（安政3）年土佐の坂本龍馬が江戸に出て、北辰一刀流を学んでいる。

清は、この江戸修行において、大村益次郎から兵学を学んだ¹⁰⁾。大村益次郎は、1856（安政3）年3月、宇和島から江戸に出て、番町に蘭学塾「鳩居堂」を開き、蘭書を講じた。翌1857（安政4）年には幕府の講武所の教授を命ぜられた。大村益次郎が、長州藩士となり、鳩居堂を閉じて長州に戻るのは1863（文久3）年である。

清は、24歳で、一時、大村に戻った。一年足らずの江戸滞在であったが、外国との条約締結を巡る安政年間の騒然たる雰囲気の中での滞在であった。大村へ戻ってからの清は、藩内の近代化と藩の思想を勤王に纏める役割を果たした。特に、兵式の近代化を通して、蘭学から英学への接近している。筆子は、幼少時代から、外国人との交友の中で育った形跡がある。それは、こうした清の外国との交際の中で培われたのではないかと想像される。

2. 勤王運動と叔父、渡辺昇

一方、昇は、清の帰国の頃江戸に出ているが、江戸出府の年について、昇の記憶と実際については、『台山公事蹟』によれば、1858（安政5）年、昇20歳にして、父雄太夫が藩主の江戸出府に随行するのに連れられて、初めて、江戸に出たとされ

る¹¹⁾。これに対し、外山幹夫氏は、「安政七年（一八六〇）、二三歳」¹²⁾とされた。しかし、後述の如く、昇と水戸の武田耕雲斎との交遊が事実とすれば、外山説は無理があると思われる。

昇は、江戸で、儒者安井息軒のもとで「文学を修行」し、傍ら、神道無念流の斎藤弥九郎の道場「練兵館」に入門した¹³⁾。当時の練兵館の塾長は長州の桂小五郎（木戸孝允）で、桂の長州帰国にあたって、昇が斎藤道場の塾長となった。当時、練兵館には、この他に、高杉晋作、中江雪江、品川弥次郎、山尾庸三、伊藤俊助（博文）、谷干城らがいた。特に、斎藤弥九郎が水戸の徳川斉昭や長州の毛利公の邸で出入りを許されていたことから、水戸と長州の出身者が多かった¹⁴⁾。昇は水戸藩の徳川斉昭の家臣で、勤王党の指導者武田耕雲斎ともつき合いがあった¹⁵⁾。武田耕雲斎は、1856（安政3）年から1858（安政5）年まで、江戸小石川の水戸藩邸に在った。従って、昇と耕雲斎の出会い、この間の事になる。また、その一方で、昇は、「試衛館」道場の近藤勇とは剣を通じて親交があった¹⁶⁾。この試衛館の所在地は、「市ヶ谷柳町の坂の上」で「市谷甲良町」とされている。交通では、地下鉄東西線早稲田駅下車徒歩15分の所である¹⁷⁾。ここは、神道無念流の道場「練兵館」の九段坂上三番町から、それほど遠い所ではない。昔の健脚なら、目と鼻の先である。

昇の回顧談によれば、試衛館に他流試合の者が来ると、昇を呼びに来た。これに対し、吉田光一氏は、天然理心流の道場主である近藤が、他流試合に助っ人を依頼したとは考えられない¹⁸⁾、としている。しかし、一方で、峰隆一郎氏は、近藤勇は「試衛館に他流試合の者がくると、近藤は弥助を呼びにやらせた。」¹⁹⁾と書いている。弥助は、神道無念流の使い手であった。いずれにせよ、練兵館と試衛館とは交流があった。勇は後年、新撰組隊長として勤王派の昇らを弾圧するが、その時にも、尚、昇に心を通わせるものがあった。

このように昇は、幕末の江戸で、勤王の志士と交わり、交友の輪を広げていた。これらの人々は、

明治政府や在野で力を発揮する。筆子の活動の廻りに、常に、これらの人々の支援があるのは、先に述べた清とともにこうした昇の活躍の輪によるものであろう。

3. 大村藩の勤王運動と筆子の出生

このように、幕末の動乱期に、清と昇は、長崎、江戸等において、時勢を身に感じ、天下の志士と交わり、内外の形勢、現下の急務について知るところがあった。こうして、両者共に大村の地へ戻ってきた。この時期、年代は明らかでないが、清が、結婚している。

一方、世相は益々騒然としてきた。大村藩が位置する西南日本では、薩摩藩、長州藩を先頭に、尊皇攘夷派が勢力を伸ばしつつあった。このあわただしい動きの中で、1860（万延元）年、筆子が、大村の地で生まれている。しかし、父清、叔父昇は、幕末・維新の激しい動きのままに、藩の内外の事件に振り回されていった。まだ、祖父雄太夫は健在であったから、筆子は、大村の自宅で、祖父母と母に守られてその幼児期を過ごした。

1861（文久元）年7月、大村藩主は家臣団に異変に備えるべきことを指示し、翌1862（文久2）年8月、隣藩の平戸藩と同盟を結んだ。しかも、この間、先に、長崎、江戸に留学し、諸藩の志士たちと交わって全国的視野を身につけ、著しく政治意識を高めた少壮の藩士たちが相次いで帰藩し、尊皇攘夷派を形勢しつつあった。昇も1863（文久3）年3月、国々を武者修行しながら、大村に戻っている²⁰⁾。これに対し、藩内では、佐幕派の勢力も強く、勤王派と佐幕派の対立が芽生えてきた。

1863（文久3）年5月1日は幕府による攘夷決行予定日で、5月10日、長州藩が下関でアメリカ船を砲撃した。これに対し、6月1日、米、仏、蘭の連合艦船が下関を砲撃し、5日、前田海岸に上陸、砲台を破壊して引き揚げた。この時、昇が藩政府の命令で、その戦跡視察に派遣されている。昇は、竹崎町の廻船問屋白石正一郎宅で長州の高杉晋作と会談した。高杉が下関に来たのが6月6

日で、11日には有志党を奇兵隊と衣替えし、13日、阿弥陀寺に本営を移している²¹⁾。昇は、長州藩の攘夷の実態をつぶさに視察して、大村へ上方の情勢を伝えた。これが、大村藩の勤王派旗揚げのきっかけになった²²⁾。

一方、大村藩においても、佐幕派による尊攘派への弾圧が始まった。こうした内外の情勢に押されて、1863（文久3）年12月、尊攘派による「改革同盟」（三十七士同盟）が結成された²³⁾。この時、清と昇は、松林廉之助らと力を合わせて、文武館の指導にあたり、兵制の改革のために活躍した。清28歳、筆子3歳である。

明けて、1864（元治元）年7月19日の禁門の変に続いて、8月13日、幕府に長州再征伐の勅命が下された。同年8月18日、大村藩では、改革派同盟の意向を受けて、藩主は、病気を理由に長崎総奉行の辞職を願い出て、9月21日に許可された²⁴⁾。10月、昇は、渡辺家の部屋住みの身分から、特に一家を立てることを許され、馬廻役として蔵米40を給された。渡辺清、昇は、藩主の信任厚く、「応接掛」として、諸藩との交際に従事した²⁵⁾。

1864（元治元）年10月、藩論を統一し、尊皇運動に乗り出した大村藩は、先ず、福岡藩と連合した。次いで、12月15日、幕府の第一次長州征伐令に対し、幕府に征長中止を求める建白書を提出した。清は、第一次長州戦争の長州攻撃の中止を求める陳情書を小倉の副総督に提出する使節の副使を勤めた。12月27日、幕府は征長中止を決定した。

九州では、筑前藩とその同盟たる大村藩が長州方として孤立の傾向があった。筑前藩と薩摩藩は姻戚関係にあった。そこで、昇は、博多で西郷吉之助に面会した。これが、西郷と昇の最初の会談となり、その後の交遊が始まった²⁶⁾。

この最初の会談で、昇は、西郷に筑前・薩摩・長州の三藩連合の必要を説いた。この構想は実現しなかったが、後の薩摩、長州の連合のきっかけとなった。また、昇は、この間、しばしば長崎を訪れ、伊藤俊助（長州）や五代才助（薩摩）らと

接触をしていた。俊助とは、江戸遊学中に桂小五郎を通じて旧知の中であった。1865（慶応元）年5月、土佐藩の吉井源馬の仲介で、当時、長崎滞在の土佐の坂本龍馬と会った。龍馬は、5月16日、小松帯刀と同行して、鹿児島から長崎に向かい、亀山に宿を決め、「亀山社中」と称した²⁷⁾。

昇も後年長崎で「一夕才谷梅太郎の下宿」で「薩長の懇和」について語り合ったと述べている。この時、龍馬は、桂小五郎や高杉晋作と親交がある昇に、長州との仲介を依頼した。昇は、翌日、薩摩の五代才助と長州の伊藤俊助と相談した。昇は、一旦大村に戻り、藩庁の同意を得て、長崎に来ていた伊藤俊助（博文）と大村を經由して下関に同行した。7月20日下関着、翌21日、再び竹崎町の廻船問屋の豪商白石正一郎宅で、高杉晋作と会談した。ついで、桂小五郎と会談し、薩長の和解を説得した。昇の談話によれば、桂は三田尻におり、薩摩の黒田了助（清隆）、村田新八も一緒に、桂、昇と一緒に蚊帳の中で語り明かした。昇は、更に、高杉晋作と桂小五郎に、薩長和解の事を説いた²⁸⁾。

なお、この年（慶応元年）、清が、藩主の命により、兵学砲術師範の子弟7、8人を率いて長崎に行き、2、3ヶ月間、英式訓練を学んで帰藩している²⁹⁾。

1866（慶応2）年1月22日薩長連合が成立した。1866（慶応2）年6月、幕府の第二次征長軍を発した。これに対して、長州は、7月3日、伊藤俊助を軍艦買い付けのため、長崎に派遣した。俊助は、薩摩藩邸に潜み、五代才助の斡旋のもとに、グラバーと軍艦買い付け契約を結んだ。一方、昇も、この間、しばしば長崎に赴き、五代才助と接触していた。俊助は、桂宛の書簡で、長崎での昇について「余程よき人物」³⁰⁾と述べている。

昇は、長崎で俊助と再会した。俊助は、グラバーから汽船二隻を購入した。帰国に際しては、昇と共に大村、平戸を經由して長州に向かった。7月20日、昇は、下関に着いた。翌21日、奇兵隊の高杉晋作に面会、薩長両藩の提携の必要を説いたが、

高杉は慎重な姿勢を崩さなかった。23日、昇は小郡に到着、桂小五郎に面会を申し込んだ。昇は、特に許されて、8月、山口に入り、長州藩主毛利敬親の世子、桂小五郎と会談し、薩長連合の必要を説いた。帰路、再び下関で、高杉晋作と会談、8月中旬、大村に戻った。

この間、1865（慶応元）年8月、藩政府の中枢は改革派によって固められた。藩主は、これらの勢力を背景として、1866（慶応2）年7月、西洋銃を買い入れ、西洋銃隊を編成、軍制の近代化を図った。この時、藩士の二、三男より、強健なるものを選び、約百名による洋式軍隊精忠組を組織し、清をその「支配」に任命した。こうして、筆子が幼年期を迎える頃、父と叔父は、藩の改革派の中心人物として、多忙な生活に入っていく。

また、1866（慶応2）年9月2日、昇は藩主の正使として薩摩藩を訪れ、小松帯刀、西郷隆盛らと面談、薩摩藩と大村藩の提携を図っている。平尾道雄氏によれば、「当時、長州の木戸準一郎や薩摩の五代才助、それに肥前大村の渡辺昇などが集まって、馬関に商社を設立する計画を立てた。」³¹⁾これが、11月にいわゆる「馬関議定書」となり、翌1867（慶応3）年4月の海援隊結成につながる。同年12月、長州の桂小五郎が大村藩を訪ね、昇らと会談した。このように、慶応2年には、薩摩、長州、土佐、大村の提携が成立した。

一方、大村藩内の改革派に対する佐幕派の反撃は、慶応年間に、激しさを増した。佐幕派は、1866（慶応2）年の夏、神道無念流の採用を不満とする新陰流の師範達を中心に、藩主の一族を巻き込んで、結束を固めた。翌1867（慶応3）年1月3日、新年の家臣団総登城の日、改革派の中心人物である針尾、松林廉之助、渡辺昇の三人を襲った。針尾と松林は凶刃に倒れたが、昇は難を逃れた。昇は、犯人追及の主導権を握り、4月に犯人を処罰し、藩政を改革派の手に取り戻した。「丁卯（ていぼう）の内訌」である³²⁾。その解釈についての異説³³⁾もあるが、定説に従っておく。この時、犯人の搜索にあたった文武館隊と新精組を、

奇兵隊にならって正規の軍隊とした。指導者は、渡辺清、昇であった³⁴⁾。

翌1867（慶応3）年4月、京都にいた薩摩の大久保市蔵が大村藩の上京を促した。ついで、5月初旬、土佐藩の石川清之助（中岡慎太郎）、清岡半四郎が、薩摩を回って、西郷、大久保らと相談し、大村藩を訪ね、清らに、京都の状況を告げ、大村藩の上洛を促した。その時は、清が、時期が早いと断り、同時に、土佐の山内容堂の逡巡の情報を伝えた。中岡慎太郎は、坂本竜馬に相談するため、長崎に向かった³⁵⁾。

4. 維新戦争に奔走する清、昇と大村の筆子

藩内の騒動の結末をつけた大村藩は、まず、1867（慶応3）年5月、15名の新精隊を編成し、清を隊長にして、上洛させた。幕府に疑われずに上洛するために、昇が、坂本龍馬を長崎の海援隊に訪ねて相談した。そして、竜馬と後藤象二郎と土佐藩の夕顔丸に同乗して上洛することになった。そこで、銃を長崎に運び、新精隊は、夕顔丸で、6月9日、長崎を発った。竜馬と象二郎は、大政奉還を勧めるための旅であり、清らも、帰還を期しがたい船出であった。竜馬の「船中八策」は、この船中で書かれた。11日、兵庫着、竜馬ら一行は陸路、清らは、夕顔丸で大阪に向かい、12日に大阪に着き、中之島の藩邸についた。

まず、清が京都に潜入し、新精隊の京都滞在中の世話を西郷と大久保に頼み、大阪に戻った。そうして、6月19日、新精隊は銃を隠し持ち、幕府の隠密の目を逃れて京都に入った。翌日20日、西郷、大久保らの計らいで、薩摩藩二本松藩邸と相国寺に近い虚無僧寺道正庵を宿所とした。清は、薩摩藩邸42番室に入った。当時、薩摩藩邸の他藩人は品川弥二郎、世良周蔵と清だけであった³⁶⁾。当時、京に出兵していたのは、薩摩藩のみのため、清らは薩摩藩兵として、行動した³⁷⁾。当時、薩摩藩の兵式は専ら英式であった。大村藩の新精隊員は、薩摩藩にで、薩摩藩士鈴木竹五郎によるイギリス式の軍事教練を受けた。この頃、京都にいた

大村藩士十数名なども新精隊に入り、7月には、新精組は100人近くになっていた。このため、新精隊は、長崎奉行や京都守護職から嫌疑を受けることになった。

こうした状況を見て、藩主の純熙は、同年8月、昇らを上洛させ、8月21日、清に対し、一時、新精隊ともども帰郷命令を伝えさせた。これに対し、清は、今、京都を離れることは出来ないとしたが、西郷の意見で、清は京都に残り、昇は土鉄砲組のみを率いて、大村に帰藩することとなった³⁹⁾。清は、「西郷とは平生往来して其論を聴」³⁹⁾ 仲であった。

この時、昇は、今出川西入ルの小間物屋綿屋武助の家を拠点にしていた。これを知った新撰組副長土方歳三は、昇を捕縛しようとした。しかし、近藤勇は江戸での昇との交遊から、これに賛同しなかった。しかし、京都守護職も昇の捕縛を承認するに及んで、遂に、昇の襲撃が決まったが、歳三らが綿屋に切り込む直前、勇は昇にこれを告げ、逃がした。

8月30日、昇が総勢を率いて帰藩するように見せ、清は、残りの藩士とともに、薩摩藩邸の42番室に入った。この間の財政の面倒を見たのは西郷であった。清は、「交誼を厚くした人々」として、薩摩の西郷兄弟、村田新八、黒田了助、中村半次郎（桐野利秋）、伊集院兼寛、長州の品川弥次郎、世良周蔵、土佐の才谷梅太郎（坂本龍馬）、石川誠之助（中岡慎太郎）の名前を挙げている。坂本龍馬の木屋町の宿を訪ねて、会談したのが暗殺の前日であったことは、後で述べる通りである⁴⁰⁾。

こうした中で、10月14日、将軍徳川慶喜は、朝廷に対し、大政奉還を申し出て、翌15日受け入れられたが、倒幕派はこれに満足しなかった。11月14日、まだ、京都にいた昇は、坂本龍馬を訪ねた。そして、「なぜ土佐藩は兵を上京させないのか。」と主戦論を展開した。これに対し、竜馬は「たしかにその通りだ。しかし、決心のつかない連中が上京しても邪魔になるだけだ。」と答えた。竜馬が刺客の手にたおれたのは、その翌日の15日の事

である。その日、清は、直ぐ現場に急行、死骸に対面している。

清は、京に残ったが、この後、昇は、大村に戻り、藩政に従事することになる。1867（慶応3）年10月14日の大政奉還直後の11月21日、昇は、藩士による「十三隊」の5人の指揮者「督議」の一人となった。同年12月には、使番役となり、藩政の中枢に入った。

京の倒幕派は、更に、12月9日、慶喜に將軍職の「辞官」のみでなく、領地も朝廷に返還させようとする「納地」を認めさせる王制復古のクーデターを決行した。この前日の8日、清は、西郷に呼び出されて、その計画をうち明けられ、兵を出し、乾門の傍らの穴門を守った。次いで、土佐藩が出兵しないため、西郷に要請されて、日の御門の守備についた。こうして、会津、桑名の守衛隊を追放し、クーデターは成功した⁴¹⁾。12月13日、徳川慶喜が二条城を出て、大阪城に入った。15日頃には、清たちも御門の守衛の任務を解かれて、北野付近の民家二、三軒を借りて、兵を休めていた。

この間、慎重に構えていた大村藩も、情勢の展開をみて藩主自ら上洛の意志を固めた。藩主一行は、薩摩の藩船富有丸に乗って大村港を出航した。この時、薩摩の上洛は確認できたが、長州の上洛の意志の確認が出来なかった。そこで、長門福浦に寄港した時、昇は、1868（慶応4）年1月1日、長州藩を訪れ、長州藩の上洛の意志を確認した。藩主一行は、1868（慶応4）年1月9日、兵庫に到着し、ここで上陸、陸路京を目指した。

長州での役目を果たした昇が陸路藩主一行を追って行ったが、尾道付近で、京都付近で鳥羽・伏見の戦いが起こった事を知った。藩主の乗船が薩摩藩の船であったため、幕府軍の攻撃を受けることを恐れた昇は、道を急ぎ、9日、藩主一行と同じ日に兵庫に着いた。

一方、藩主の乗船が薩摩の船であるとして、兵庫港において、フランス軍によって捕獲された。その釈放の談判役として昇が任命され、長州の遠

藤勤助を通訳として英仏両国の領事と交渉に入った。その時、伊藤俊助・寺島陶蔵（宗則）が朝廷の使者として派遣され、外国領事を訪ね、政権が朝廷に復したことを告げた。これを確認した昇が再び談判し、夜の6時に船を取り戻すことができた。昇は、大久保一蔵に書簡を送り、更に、兵庫から大阪への帰途に同船した東久世侯らに、長崎を始めとする開港地の警備の必要を進言した⁴²⁾。

1868（慶応4）年4月10日の藩政改革では、昇は、楠本正隆と共に用人となって、藩政を動かす立場についたが、その後は、中央へと活躍の場を移すことになる。

【鳥羽・伏見の戦い】1868（慶応4）年1月3日、鳥羽・伏見の戦いが起こった。渡辺清は、13日、大村藩兵を率いて、大津を守りについた。大村藩兵は、この時から、西郷の了解を得て、大村藩兵として、五ツ木瓜の藩旗のもとに行動することになった。大村藩主一行は、1月13日に入洛し、15日、明治天皇のご機嫌を伺い、新精隊出陣の感状を拝領した。藩主一行が京都に入ると、清は、大津から京都に来て藩主に拝謁した。

大村藩隊は、東海道鎮撫総督指揮下に入り、その先鋒として、1月28日、桑名を受け取った。新政府軍は、東海、東山、北陸の三道から江戸への進撃を開始した。この時、清は、東海道先鋒隊の一員として、大村の藩兵とともに、東海道から江戸に向かった。

この時の清の肩書きは、「大総督府参謀」とする説が多い。しかし、一方では、「東海道先鋒総督の参謀は、長州の木梨精一郎と薩摩の海江田信義」⁴³⁾とされる。また、外山幹夫氏の年表では、「閏四月三日、東海道鎮撫総督軍監参謀。六月七日、東征大総督参謀」（249頁）とあり、『百官履歴（一）』231～232頁によれば、次のようである。

「明治元年戊辰閏四月四日 東征軍監仰付上総国八幡村辺へ出張被仰付候事 東海道先鋒総督／同月東征軍参謀被仰付候事 大総督府／六月九日 大総督府下参謀助被仰付候事／

同月十一日奥羽追討総督参謀被仰付奥羽進撃被仰付候事」

外山説、『百官履歴』では、日時や表現に違いが見られるが、いずれも、江戸城開城後、奥羽戦争以降の履歴である。東海道先鋒隊の清の肩書きについては、今後の課題としたい。

清ら官軍先鋒隊が府中（静岡）に到着した時、勝海舟は、西郷あてに官軍を府中に止めることを求める書状を送った。西郷は、この内容を見捨てた。西郷は、各藩の隊長を召集して、輪王寺宮の箱根越えを阻止するために、小田原出兵を命じた。この時、清は、箱根の占拠が大事であると提案し、西郷の許可を受けて、翌日、三島を経て、箱根を押さえた。3月6日には鎌倉に到着している。こうして、清は官軍の先頭を切って江戸に入った。

【江戸開城】江戸の清ら大村藩隊は、下屋敷に近い大村家の江戸の菩提寺、白金の承教寺に滞陣した。大村藩の江戸藩邸は、上屋敷が永田丁、下屋敷が芝白金にあった。こうして、清は、品川の薩摩藩邸での西郷と勝の会談に臨むことになる。

1868（明治元）年3月13日の勝と西郷の会談の前に、清は、西郷の命令で、江戸攻撃の際の傷病兵のために、イギリスの病院を借り受ける交渉に、参謀の木梨精一郎と、横浜の英国公使館にパークスを訪ねた。しかし、パークスは居留地の局外中立性を盾に、その要請を拒んだ。非はこちらにあることを悟った清らは、品川で西郷にその結果を報告した。

この日付について、清は、西郷と勝の会談の「当日」、即ち3月13日の事として語っている。清の談話によれば、この日、勝海舟が、西郷との会談のために、薩摩邸で控えていた。西郷は、この話を胸にしまって、会談に臨み、江戸城攻撃を中止した⁴⁴⁾。この時、清は、薩摩の中村半次郎、村田新八らとともに、西郷に従って、会談に臨んでいる。

しかし、「渡辺の談話には、傍証となるものも乏しい」⁴⁵⁾として、異説もある。即ち、「翌十四日」説及び「十五日の江戸総攻撃中止以後」説な

どである⁴⁵⁾。上に引用したように、この日を13日とする清は、西郷の「腹芸」説を取っているものであり、一方では、清が「西郷と勝の談判を傍にいて聞いていたというのも、これだけ（史談会で）の話の内容からみて、まんざらウソとは思えない。」⁴⁶⁾とある。日時については、尚、新史料の出現が待たれることである。この会談に際し、清は、どちらかと言えば、主戦派であった。これに対し、西郷参謀や木梨精一郎らは、なるべく戦争は避けたいと思っていた。

1868（慶応4）年4月11日、東海道先鋒総督が勅使として江戸城に入城した。大村軍は土屋善右衛門と宮原俊一郎が率いて、西の丸と田安邸を警備した。21日、大総督有栖川熾仁親王が江戸城に入り、前將軍徳川慶喜は上野寛永寺を出て、水戸に移り、恭順の意を表した。しかし、旧幕臣の一部の抵抗意識は根強く、江戸市中では、彰義隊が上野寛永寺に集まって、徹底抗戦を叫んでいた。また、関東各地でも、同様に旧幕臣は諸藩の脱走者がゲリラ戦を展開していた。清は、これらの騒動の鎮圧に関東各地を転戦した。

【八幡・姉崎戦争】 閏4月、清は、東海道鎮撫総督府より、房総方面の不穏な情勢の鎮撫のために出陣を命ぜられた。その時の陣容は、副総督柳原前光を鎮撫討伐使とし、清と安場保和を臨時に「軍監」⁴⁷⁾とするものであった。

清は、大村藩兵とともに、閏4月4日、江戸を出立した。柳原前光は、翌5日、国府台の総寧寺に入り、軍議を催し、薩摩の相良治郎（長発）を右軍監、渡辺清を左軍監に任命した。翌6日、清は、長州、岡山、津、大村の各藩兵と共に、佐倉街道を通り、蘇我野へ到着した。相良の率いる薩摩、津、砂土原の兵は、海岸に沿って、共に木更津を目指した。

その夜、蘇我野から斥候に出ていた薩摩藩士二名が、旧幕軍の撤兵隊と遭遇し、殺されたため、蘇我野の各藩兵と寒川に来ていた大村藩兵は、急遽市川八幡に集まり、7日、未明、進軍を開始した。新政府軍は、三手に分かれて進み、五井に本

陣をおいた撤兵隊を破った。養老川を渡り、昼食、休憩の後、撤兵隊の本営である姉崎の妙経寺を攻撃し、午後一時頃、占領している。その後、全軍、五井に戻り宿営した。その後、新政府軍は撤兵隊の本拠地、木更津方面に進撃、本営の真如寺を焼き払った。こうして、閏4月28日、撤兵隊全員が、新政府軍に投降し、この方面の掃討作戦は一応の決着を見た⁴⁸⁾。閏4月、東征大総督は大村藩隊長に対し、この時の働きに対し、感状を与えた。また、朝廷からも「一層精忠を抽んずべし」との沙汰書を下された。

【上野戦争】 上総から帰った清は、江戸城攻めについての意見を聞きに、官軍の軍監大村益次郎に会いに行った。大村益次郎は、清の蘭学の師であり、先鋒隊に遅れて、東海道軍本隊とともに、江戸に到着したのであった。その時には、上野に彰義隊が集結していた。

清が、江戸攻略の作戦について、益次郎の見解を質した。益次郎の答は、新しい作戦が必要だと言うものであった。しかし、清が、上野の彰義隊攻撃を進言しても、益次郎も、西郷も、腰を上げなかった。それは、当時、江戸にいる藩の中で、本当に戦争が出来るのは、薩摩藩、大村藩他、二、三の藩に過ぎなかったためであった。

そこで、西郷と大村益次郎は、これらの諸藩も立ち上がらざるを得なくなるきっかけとして、勅使を立てて、降伏を勧告した。それが拒まれたため、上野の彰義隊を攻略にかかった。5月15日未明に始まった上野の彰義隊との戦争では、大村藩は長州藩とともに背後の団子坂に配置された。大村藩隊は、折からの雨天による小川の出水で往来が出来ない上に、団子坂付近で彰義隊に苦しめられたが、砂土原兵の応援を得て、最後は彰義隊を撃破し、砲台を鎮圧した⁴⁹⁾。また、大村藩の大砲隊の一部が、赤坂見附付近に配置されていた。上野攻めが始まった後で、独りの武士が、大村隊の兵士に捕らえられた。それは、勝海舟であったが、清の命令によって、釈放された。上野の戦いは、本郷台に据えられた肥前藩の大砲の威力などで、

正午には大勢が決し、夕方には、新政府軍の勝利となった。

【飯能戦争】上野での戦争は、5月15日に、ほぼ、終結した。その後、新政府軍は、幕府方の渋沢成一郎指揮する振武軍が青梅方面に向かったことを把握した。そこで、大総督府は、5月20日、大村藩の渡辺清を軍監とし、大村、筑前、筑後、砂土原の九州勢四藩の各百名による本隊と備前藩士雀部八郎が率いる備前藩士による先発隊を編成し、追討に向かわせた。5月22日、渡辺本隊は先発隊と扇町屋で合流、軍議を行い、大村隊は、備前隊、砂土原隊と共に、本道からの追撃を受け持つことになった。23日未明、戦端が開かれた。振武軍には、大砲がなく、これに対し、新政府軍は、大砲で攻撃したため、午前11時には、振武軍の本営、能仁寺を占領した。5月24日、清は、大総督府の命令によって、筑後藩を、残敵追討のために残留させ、他の全軍を率いて帰京した⁵⁰⁾。清が、指揮官として戦った最初の勝利であった。

【会津の戦い】江戸の無血開城、上野戦争の勝利によって、新政府軍の権威は高まり、新政府軍の求めに応じ、多くの諸藩が兵員を派遣した。一方、奥羽越31藩は、5月3日、同盟を結び官軍への抵抗の姿勢を鮮明にした。関東をほぼ制圧した新政府軍は、この兵力を東北諸藩に向けることにした。5月19日、有栖川宮熾仁親王を東征大総督に、また、新たに会津征伐大総督を兼任させた。6月11日、参謀正親町公薫を奥羽追討総督とし、その補佐として、木梨精一郎を参謀補助、渡辺清を下参謀に任命した。こうして、一度帰京した、渡辺清は、引き続き東北方面に派遣された。6月11日に発表された奥羽追討計画によると、平潟口の兵は、泉、湯長谷、平、相馬の磐城諸藩を攻略して仙台に向かい、白河口からの兵と合同して会津藩を攻略すると言うものであった。

6月11日、大村藩兵（銃砲隊142名と砲一門）は、薩摩藩兵（407名）、砂土原藩兵とともに、第一梯団として平潟に向かう命令を受けた。6月13日、品川沖を出発、6月16日、平潟港沖に着いた。

一行はさしたる抵抗も受けずに、その日のうちに上陸を終わっている。翌17日、平潟奪回のため、接近してきた東北同盟軍と薩摩兵が遭遇、戦闘になった。この時、海岸道を受け持っていた大村藩兵も砲兵をもって攻撃し、同盟軍を撃退した。東北口最初の戦闘である。しかし、この段階では、東北諸藩兵に比較して、官軍の兵力は二千名に過ぎなかったため、清は、援軍を要請するために、東京に引き返している。この結果、因州兵が海路から、備前、柳川両藩兵が陸路から平に到着した。

6月25日夕刻、土佐藩による棚倉城占領の報が入り、平潟上陸軍も急いで行動する必要に迫られた。27日夕刻、軍議を開き、28日行動開始を決めた。この軍議には、海軍の視察に棚倉に来ていた板垣退助も参加している。6月28日未明、大村藩兵は、薩摩、備前両藩兵とともに、海岸道から泉に向かい、因州藩と柳川藩の兵は、木梨が率いて、湯長谷方面から攻撃を開始した。海軍は、既に、藩主が立ち退いていた泉館を簡単に落としたが、本街道を進んだ砂土原・柳川両藩が苦戦したため、新田攻めの応援にも駆けつけている。一旦、泉館に戻った新政府軍は、泉奪回を目指した同盟軍を撃退、小名浜に向かい、小名浜を占領した。7月1日、小名浜を出発した浜手軍は、平城攻略に着手した。平城下までは比較的容易に到着したが、城を守る同盟軍の抵抗のために、膠着状態に陥った。その間、浜手軍は、7月10日には、小名浜から平に通ずる街道の要衝、七本松で、抵抗する同盟軍を敗退させた。新政府軍は、援軍を増強し、7月13日を平城総攻撃の日とした。

7月13日早朝から、新政府軍による平城総攻撃が始まった。大村藩兵は中央隊の一員として、小名浜から出陣した。中央隊は、本道を進んだが、殆ど抵抗を受けることなく、平城から1キロ地点に到着した。

当初の作戦は、城の背後の山に敵を追い込むというものであったが、城を仰ぐ形の攻めになってうまく行かなかった。そこで、清は、逆に、城の裏門の山手に大砲を引き上げ、城内に打ち込んだ。

その作戦の遂行中に、木梨の使いが参謀会議の開催を伝えてきた。清は、もう少しで落城すると伝えたが、再度の召集によって、攻撃を中断した。参謀会議には板垣も出席した。木梨は、このままでは、城は落ちないとして一時引き上げを提案した。清は、反論を唱え、木梨と論争となった。板垣が、参謀がもめていては戦争が出来ないとして、一日待って、明日攻撃しようと言ったことになった。しかし、その夜、平城の守備兵は、自ら城に火を放って落ちていった。翌7月14日、新政府軍は、平城に入城した。その日、板垣は、城で夜を明かすことを提案したが、木梨は軍を引き揚げていった。

そうこうしている内に、敵方の三春藩から、兵を向けてくれれば帰順するとの使いが来た。三春藩と大村藩は縁続きであった。そこで、清は、板垣を打ち合わせて、板垣は須賀川から石川を経て三春へ、清は、新町を経て三春へ向かい、三春を占領した。この三春で、大村からの第一次増援軍と合流した。

三春滞陣中に、大総督から、次に海岸を攻め上り、中村、仙台、白石、米沢を攻略して、そこで、官軍を二分し、一隊は秋田攻略軍の応援に、一隊は会津攻略にかかれとの命令を受け取った。しかし、この命令では、会津攻略が雪の10月にかかるとして、清は板垣の同意を得て、二本松を落としたら、直ちに会津攻めにかかることにした。こうして、板垣は、本宮から本道を通り、清は須賀川から二本松を攻めて、これを落とした。ここで、木梨参謀が帰京、清が二本松の守備にあたった。8月19日頃のことである。8月22日、猪苗代で会津軍と対陣した。23日、大村軍を先鋒として、土佐、大垣、薩摩、長州の連合軍は、若松城に通じる十六橋を経て、城下に達し、城を囲んだ。城下の市民は城に逃れ、市中には人影はなかった。

大村軍は大手門から進み、激戦が展開された。この時、飯盛山では、白虎隊の悲劇が展開されていた。会津戦争での大村藩の戦死者は8月23日、この若松城下の戦いに集中（死亡6名、重傷9名、

内3名後に死亡）している⁵¹⁾。戦いは、その後持久戦となったが、9月14日総攻撃が行われた。大村軍は佐賀、薩摩、松代の諸藩の大砲隊と連合し、天寧寺山に布陣して、若松城を砲撃した。これに対し、若松軍も抗戦が続けたが、17日になると城兵は糧食も尽き、弾丸も欠乏してきた。清は、この時、二本松の守備を大村藩の隊長に任せて、板垣と共に会津との和平交渉に参加した。8月22日、城主松平容保父子は城を出て降伏し、開城させることに成功した。

その後、仙台藩、米沢藩も下り、ここに東北戦争も幕を閉じた。大村軍もその後福島に陣を移した。ここで、10月9日、白河口総督から、その働きに対して、褒詞と目録を与えられた。次いで、凱旋に移り、10月14日、福島を出発し、28日、東京着、11月3日東京発、24日、大阪から汽船に乗り、27日大村に帰着した。

5. 維新政府への出仕と筆子の上京

① 維新政府基礎固めに参画：王政復古後、兄弟は、新政府の足固めに尽力した。長崎では、1868（慶応4）年1月14日、幕府の長崎奉行が退去すると、長崎会議所が作られ、1868（慶応4）年2月1日、長崎裁判所が設置され、昇は、同年4月、「諸郡取調掛」となった。しかし、同年5月23日、「長崎府」が置かれると、昇は御役御免となっている⁵²⁾。

次いで、昇は、5月、耶蘇宗徒御処置取調掛に任命された。6月には、浦上のキリシタン114名が、長崎港から萩、津和野、福山に流された。7月には、五島で福江藩の分離、統合問題を巡って「富江騒動」が起こった。昇は、長崎裁判所参謀井上聞多と現地に赴き、事態の収拾にあたった。1868（慶応4）年閏4月27日、「政体書」による中央集権、三権分立の新政が敷かれた。この政体書による「太政官七官」の中に、司法機関「刑法官」が置かれた。昇は、同12月17日「権弁事」となった。同月26日には「刑法官権判事」兼務となり、即日「五島表へ鎮撫使」を発令されている⁵³⁾。

1869（明治2）年2月12日、太政官に「軍功賞典取調掛」が置かれた。同月、清は、至急上京せよとの命令が出された。清は、大村藩での仕事に差し支えることから、容易には受けかねていた。しかし、賞典取調掛が維新での勲功の調査であることを伝えられたため、同年2月、要請を請け、大村を出発した。長崎を3月6日に出港、同月末に東京に着き、4月9日、「賞典取調御用掛」となり、同年5月25日、「兵部省出仕賞典取調中准五等官」に任ぜられた。取調掛頭取は大村益次郎で専任掛は清と香川敬三の二人であった。香川敬三は、後に、筆子の渡米の援助者となる人物である。清らの任務は、6月2日の維新時の功績に対する賞典録及び感状決定であった。この時、大村藩は、三万石を、清も四百五十石の賞典録を受けている。この賞典授与が一段落した6月4日、清は賞典取調御用掛を免ぜられた。清は、この時点で上京しているが、筆子らはまだ祖父母、母とともに、大村にいた。

叔父昇は1868（明治元）年3月、大原中納言園池中将に従って、十津川巡察として出張、朝廷の真意の普及にあたっていたが、同年4月20日、東京に召され、刑法官権判事兼任を免ぜられ、「待詔局御用掛」⁵⁴⁾となった。引き続き、5月8日、「耶蘇宗徒御処置取調掛」となった。この5月、昇は、権弁事を免ぜられ、待詔局主事となった。

② 中央官僚時代

1869（明治2）年6月8日、民部官が設置された。清は、6月10日、「徴士民部官権判事」となった。加えて、同日「三陸巡察使付属」を仰せつけられたが、6月18日には「磐城国巡察使付属」兼務となった。諸記録では「権判事」と記されているが、6月4日の「定民部官職制」によれば、「判官事」、または「権判官事」となっている⁵⁵⁾。

1869（明治2）年7月8日、民部官が廃止され、諸省の筆頭として民部省が設置され、卿、大輔、少輔、大丞、権大丞、少丞、権少丞がおかれた⁵⁶⁾。民部卿には、7月8日、民部官松平慶永が、民部大輔には民部官副知事広沢真臣が任命された。同

22日、広沢は参議に転出して、大隈重信が、その後任となった⁵⁷⁾。清は、同日、民部権大丞となった。

1869（明治2）年2月から7月にかけて、「府県施政順序・府県奉職規則」が制定され、府県の行政機構整備が進められた。これと同時に、1869（明治2）年7月8日、戦争と災害のため、民政不安定な東北の政情を視察、指導するために「按察使」が設置された。同年8月5日、磐城国白石（現在の宮城県白石市）に按察府が置かれ、「三陸磐城両羽按察使」⁵⁸⁾が任命された。同日、清は「三陸磐城両羽按察使判官」兼務とされた。

民部、大蔵両省は、1869（明治2）年8月12日、一時併合されたが、実際は、両省を並立のまま存置し、ただ、卿・大輔以下の兼任の形を取ったにすぎなかった。すなわち、この日、民部卿松平慶永が大蔵卿を兼ね、民部大輔大隈重信が大蔵大輔を兼任することとして、両省の事務を一体化した⁵⁹⁾。清は、1869（明治2）年10月25日、民部権大丞を免官となり、按察判官専任となった。しかし、1870（明治3）年2月19日、民部大丞となり、按察使を兼ねていた。按察使は1870（明治3）9月28日に廃止され、清は、同日、民部大丞専任となが、その直後の同年9月30日、清は三陸両羽磐城岩代へ出張を命じられた。同年11月、民部・大蔵両省と東北諸藩県による三陸会議が開かれ、東北地域の諸問題について協議した。清はここでも、重要な役割を果たしている。

民部、大蔵両省は、1870（明治3）年7月10日、太政官達をもって、再び分離した。1871（明治4）年3月28日、清は、三河国に出張を命ぜられた。清は、その後、厳原県に出張中の年7月24日、厳原県知事心得・事務取扱となった。同30日には、厳原県権知事を任命された。旧対馬藩主で維新後に厳原藩知事となっていた宗義達の辞任後を受けたものである。清は、約一ヶ月後の9月5日厳原県権知事を免官となり、御用滞在を命じられた。ついで、10月18日、大蔵卿大隈重信の下の大蔵大丞に転じている。従って、厳原時代の知事として

の実績に関する記録は伝えられていない。

清は、1871（明治4）年10月18日、大蔵省に戻って、大蔵大丞となった。1871（明治4）年の『袖珍官員録』には、「10月28日改め」として、卿、大久保利通、大輔、井上馨、少輔、吉田清成、大丞、渡辺清、渋沢栄一、岡本義方、津田出の名前を挙げている。このように、清は、ここでは、大久保利通に仕え、渋沢栄一とは同僚であった。渋沢栄一が、石井亮一、筆子の事業の後援者であったことはよく知られた事実である。なお、この時、筆子の母と弟が上京している。しかし、筆子は、祖父母と共に大村に残された。

一方、昇は、理由は明らかでないが、1869（明治2）年7月23日、伺いに依って謹慎を仰せつけられた。同25日、謹慎を許されている。同年、8月15日、待詔局から弾正台に入り、弾正大忠となった。弾正台は、1869（明治2）年5月22日に設置され、犯罪捜査と裁判を任務とした。1869（明治2）年8月20日の官制改正で、尹、大弼、少弼、大忠となっていた。

この時、第二回の浦上キリシタンの流刑が行われた。1869（明治2）年8月、昇は弾正大忠のまま「耶蘇宗徒処置取扱」を命ぜられ、9月、取締のため長崎に出向いた。駐日イギリス公使パークスを始め各国領事は、長崎府知事野村宗七に抗議したが、浦上キリシタン約3,000人が検挙され、近畿、中・四国、九州の21藩に流罪とした。この指揮をとったのが昇であった。また、1870（明治3）年2月19日、福岡藩で偽札事件が起こった。6月13日、昇が福岡に出張し、藩知事以下を処罰して、事件を収めた。

③ 地方官時代 ― 筆子、大阪から、東京へ ―

1869（明治2）年6月17日、版籍奉還によって、旧藩主がそのまま藩知事となった。ついで、1869（明治2）年7月8日の「職員令」で、府・藩・県に知事を置いた⁶⁰⁾。1871（明治4）年7月10日、「府県官制」によって、知事、権知事等が置かれた⁶¹⁾。

1871（明治4）年7月9日弾正台が廃止され、

司法省が設置されると、昇は、7月20日付けで盛岡県権知事となった。しかし、1871（明治4）年8月12日付けで盛岡県知事に沢宜嘉が任命されている。従って昇の盛岡時代はごく短い⁶²⁾。そのため、着任することもなかったらしい⁶³⁾。さらに、昇は、1871（明治4）年8月24日付⁶³⁾で、「大阪府大参事」となった⁶⁴⁾。

昇は、この年、1871（明治4）年11月22日、大阪府権知事となった。知事はおかれていなかったから、実質的には「知事」であった。この時、筆子は、祖父母とともに大阪に移った。12歳であった⁶⁵⁾。昇は、1878（明治10）年1月22日、正式に「知事」となった。こうして昇は、1880（明治13）年まで、9年間余、34歳から43歳までの働き盛りを大阪で過ごした。昇は、大阪でも、ドイツ皇孫ハインリッヒ発砲事件への筋の通った対応⁶⁶⁾などのエピソードを残している。昇の生き方に批判的な外山幹夫氏も、大阪時代について、「今日の大阪の発展の基礎をつくったといつてよい」⁶⁷⁾と評している。

既に、清は、厳原県権知事を体験していたが、1872（明治5）年には、東京にいた。4月28日、静岡県に出張を命ぜられた。この年の6月に、筆子が大阪から上京している。この時から翌年1873（明治5）年1月まで、旧大村藩主の娘知久子のお相手として、藩主の邸に아가っている⁶⁸⁾。13歳であった。こうして、筆子にとって、初めての東京生活が始まる。この後、日本で唯一の女子高等教育機関、官立女学校に入学、さらに、クララ・ホイットニーの塾での聖書の学習等が始まることになる。

おわりに

筆子の幼少期、12歳までは、大村において、母と祖父母に育てられたことが明らかになった。この間、父清と叔父昇は、藩の内外で明治維新のために活躍しており、殆ど、大村にいなかったか、居ても、藩の御用に飛び回っていた。従って、筆子の養育は、母と祖父母の手にあったものと思わ

れる。祖父の渡辺巖（雄太夫）は、藩の用人を勤め、文武に明るい人物であったと伝えられている。巖が孫の筆子にどのような影響を与えたかは、今後の研究課題であるが、武家の娘としての躰と教養を身につけさせる育て方をしたことは間違いないことであろう。その筆子が、外国語を学び、更に、キリスト教に接近していく過程はどのようなものであったか、今後の研究課題である。

また、清と昇の活躍には多くの人物がかかわっていることも明らかになった。本文中でも触れたように、勝海舟、渋沢栄一等は、直接に亮一、筆子の事業の援助者となる。また、伊藤博文、香川敬三、谷干城らは、華族女学校時代の筆子の後ろ盾として、その事業の理解者となる。こうした関係も、清や昇の経歴と無関係ではないであろう。その具体的関わりについてはまだ明らかではないが、その展望は開けたと言えよう。

文 献

- 1) 外山幹夫『もう一つの維新史－長崎・大村藩の場合』 新潮社、1993年
- 2) 『台山公事蹟』 29～30頁
- 3) 『台山公事蹟』 35～36頁
- 4) 平尾道雄『竜馬のすべて』
(久保書店、1966年) 67～68頁
- 5) 『台山公事蹟』 19～20頁
- 6) 土居良三『幕臣勝麟太郎』
(文芸春秋社、1995年) 74頁
- 7) 『台山公事蹟』 18頁
- 8) 渡辺清「渡辺男爵の閥歴附31節」
(『史談会速記録』 53号、1897年) 51頁
- 9) 『台山公事蹟』 24、75頁
- 10) 渡辺清「渡辺男爵の閥歴」 51頁
- 11) 『台山公事蹟』 52～53頁
- 12) 外山幹夫『もう一つの維新史』 39頁
- 13) 渡辺昇「渡辺子爵薩長和解其の他国事に執掌せられし事実附24節」(『史談会速記録』 19号、1894年) 34頁
- 14) 渡辺昇「大村藩国事執掌に関する事実附17節」
(『史談会速記録』 37号、1895年) 19頁
- 15) 『台山公事蹟』 53、78頁
- 16) 渡辺昇「渡辺子爵薩長和解其の他国事に執掌せられし事実」 34頁
- 17) 菊池明「試衛館はどこにあったか」(新人物往来社編『近藤勇のすべて』
(新人物往来社、1993年) 52、259頁
- 18) 吉田光一「近藤勇の剣」(新人物往来社編『近藤勇のすべて』)(新人物往来社、1993年) 101～102頁
- 19) 峰隆太郎『芹沢鴨』
(新人物往来社、1993) 210頁
- 20) 渡辺昇「大村藩国事執掌に関する事実」 20頁
- 21) 鈴木正節『幕末維新の動乱』
(三一書房、1977) 36～39頁
- 22) 渡辺清「渡辺男爵の閥歴」 49頁
- 23) 渡辺昇「大村藩国事執掌に関する事実」 20～21頁
渡辺清「渡辺男爵の閥歴」 22～26頁
- 24) 渡辺昇「大村藩国事執掌に関する事実」 14～18頁
- 25) 『台山公事蹟』 19、89頁
- 26) 渡辺清「渡辺男爵の閥歴」 61頁
- 27) 菅英志『坂本龍馬－男の生き方』
(新人物往来社、1992) 86頁
- 28) 渡辺昇「渡辺子爵薩長和解其の他国事に執掌せられし事実」 23～51頁
- 29) 渡辺清「渡辺男爵の閥歴」 27～28、52頁
- 30) 『伊藤博文公伝』(上) 86頁
- 31) 平尾道雄『竜馬のすべて』 239～240頁
- 32) 渡辺清「渡辺男爵の閥歴」 32～33頁
- 33) 外山幹夫『もう一つの維新史』 39頁
- 34) 渡辺清「大村藩国事執掌に関する事実附8節」
(『史談会速記録』 18号1894年) 7～15頁
- 35) 渡辺清「渡辺男爵の閥歴」 37頁
- 36) 渡辺清「渡辺男爵の閥歴」 61頁
- 37) 渡辺清「大村藩国事執掌に関する事実」 15頁、渡辺昇「渡辺子爵薩長和解其の他国事に執掌せられし事実」 46～47頁
- 38) 渡辺昇「渡辺子爵薩長和解其の他国事に執掌せられし事実」 48～49頁

- 39) 渡辺清「男爵渡辺清君の閔歴附13節」 (慶応大学『法学研究』51巻5号)
 (『史談会速記録』58号, 1897年) 36-39頁
- 40) 渡辺清「男爵渡辺清君の閔歴附15節」
 (『史談会速記録』59号, 1897年) 54~58頁
- 41) 渡辺清「男爵渡辺清君の閔歴附15節」58~60頁
- 42) 渡辺昇「仏国人兵庫港に於て大村藩の船を拘繋したる事実附28節」
 (『史談会速記録』24号, 1894年) 3~10頁
- 43) 鈴木正節『幕末維新の動乱』
- 44) 渡辺清「江城攻撃中止始末附14節」
 (『史談会速記録』68号, 1898年)
- 45) 菊池明他『戊辰戦争全史』(上)
 (新人物往来社, 1998年) 68頁
- 46) 勝部真長『勝海舟』(下) 210~212頁
- 47) 『百官履歴』(一) 23頁
- 48) 菊池明他『戊辰戦争全史』(上) 118~119頁
- 49) 菊池明他『戊辰戦争全史』(上) 72~73頁
- 50) 菊池明他『戊辰戦争全史』(上) 78~79頁
- 51) 『幕末維新全殉難者名鑑』(IV) 98頁
- 52) 『百官履歴』(六) 58~59頁
- 53) 『百官履歴』(六) 59頁
- 54) 『百官履歴』(六) 59頁
- 55) 『明治職官沿革表』(合本1) 18~19頁
- 56) 『明治職官沿革表』(別冊付録) 5頁
- 57) 内務省史編集委員会『内務省史』(第一巻)(大霞会, 1971年) 39頁, 大隈侯八十五年史編纂委員会『大隈侯八十五年史』(1926年) 312頁
- 58) 『明治職官沿革表』(合本1) 36頁
- 59) 内務省史編集委員会『内務省史』(第一巻) 42頁
- 60) 東京市政調査会『自治五十年史』
 (良書普及会, 1940年) 16頁
- 61) 内務省史編集委員会『内務省史』(第二巻) 66頁
- 62) 長江好道他『岩手県の百年(県史百年史3)』
 (山川出版社, 1995年) 17~20頁
- 63) 外山幹夫『もう一つの維新史』208頁
- 64) 内務省史編集委員会『内務省史』(第四巻) 593頁
- 65) Fude Watanabe "The Story of my Life"
 (Unpublished, 1973)
- 66) 内山正熊「吹田事件(1880年)の回顧」
- 67) 外山幹夫『もう一つの維新史』209頁
- 68) Fude Watanabe "The Story of my Life"